

【論 文】

忘れられたエコフェミニスト——鶴見和子⁽¹⁾

Tsurumi Kazuko:
A Forgotten Japanese Ecofeminist

森田 系太郎*
MORITA Keitaro

【要旨】

全5章から成る本稿の目的は、社会学者で環境思想家でもあった鶴見和子(1918-2006)をエコフェミニストとして——特に「忘れられたエコフェミニスト」として——再定位することにある。「1. はじめに」に続く「2. エコフェミニズム小史」でエコフェミニズムの定義と歴史を簡潔に確認した後、「3. 鶴見和子とは誰か」では鶴見の来し方を概観。本稿の核となる「4. 忘れられたエコフェミニスト——鶴見和子」では、実際に鶴見をエコフェミニストとして論証することを試みる。それは鶴見を「忘れられたエコフェミニスト」として蘇らせる企てでもあった。また、そこから議論を一步前に進め、鶴見をカルチュラル・エコフェミニストとして(再)定義する。終章の「5. 終わりに——蘇るエコフェミニストとしての鶴見和子」で言及するように、本稿は、換言すれば、“後から来た者 late comer”の視点から鶴見和子を歴史化し、「忘れられたエコフェミニスト」として位置付けるものである。

キーワード：鶴見和子、「忘れられたエコフェミニスト」、エコフェミニズム、
内発的發展論

1. はじめに

エコフェミニズムというフェミニズムの一派がある。日本のエコフェミニズムは1980年代に、イヴァン・イリイチの思想(e.g., イリイチ 1984 [1983])とともに輸入されたのが1つの導入経路であったが、それは大越愛子(1996 [1991]: 160)が回顧するように、不幸な導入のされ方であった。というのも、イリイチ流エコフェミニズムは、多様なエコフェミニズムが存在する中で〈女性原理〉を強調する「カルチュラル・エコフェミニズム」の一派に過ぎなかったからである。そして1980年代半ばの上野千鶴子と青木やよひのエコフェミニズム論争(日本女性学研究会一九八五年五月シ

*立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科兼任講師

ンボジウム企画集団 1985) で、反-女性原理を掲げる上野にイリイチ派と同定された青木が敗れてしまった結果、エコフェミニズムは日本の論壇から葬り去られてしまった。そして現在でも、女性本質主義的であるとスティグマ化 *stigmatize* された「エコフェミニズム」「エコフェミニスト」という用語は使用が憚られる状況が続いている(森田 2022b)⁽²⁾。

そのような状況下、筆者は、上野-青木論争後も細々と生き延びてきた日本のエコフェミニズム、そしてエコフェミニストを見直す作業を続けている。本稿ではその一環として、社会学者で環境思想家でもあった鶴見和子(1918-2006)をエコフェミニストとして——特に「忘れられたエコフェミニスト」として——再定位してみたい。一般に鶴見はエコフェミニストとしてみなされていない。管見の限り、綿貫礼子(1999)が短い文章の中で鶴見和子を「日本のかけがえのないエコ・フェミニスト」(68)と言及しているのみである。本稿の目的はその綿貫の言説を論証することにある。

論証に入る前に、次章では、エコフェミニズム思想を簡単に振り返っておきたい。本稿の理論的支柱となるからであり、また日本で誤解されてしまっているエコフェミニズムの理解を筆者と読者との間で——(いつ)にしておきたいためである。

2. エコフェミニズム小史⁽³⁾

エコフェミニズムという言葉は1974年、フランス人フェミニストの Françoise d'Eaubonne による著書 *Le Féminisme ou la Mort* (フェミニズムか死か; *Feminism or Death* [2022 (1974)]) の中で誕生した⁽⁴⁾。d'Eaubonne (2022 [1974]) はエコフェミニズムの展望として、「地球は男性性から引き離され、[中略] 女性性の中に置かれることであらゆるもののために花開くだろう」(221-222)⁽⁵⁾ と喝破した。またその約25年後には、「唯一、エコフェミニズムだけが家父長制の終焉を可能にし、社会を環境破壊から救うだろう」(d'Eaubonne 2000: 183-184) とまで述べている。様々な論客によって様々な定義がなされるエコフェミニズムであるが、本稿では簡素化し、エコフェミニズムを「環境問題とジェンダー問題を共に思考・実践する思想」と、エコフェミニストを「環境問題とジェンダー問題を共に思考・実践する思想家」と定義する。

フェミニズム自体にも色々な学派があり、その1つがエコフェミニズムであるように、エコフェミニズム内にも多種多様な学派が存在している。詳細については拙稿(森田 2022a, 2022b)を参照いただきたいが、本稿では日本語の訳書もあるキャロリン・マーチャント(1994 [1992])⁽⁶⁾ の四類型を導きの糸としたい。

米国エコフェミニストの重鎮であるマーチャントは、エコフェミニズムを(A)リベラル・エコフェミニズム、(B)カルチュラル・エコフェミニズム、(C)ソーシャル・エコフェミニズム、(D)ソーシャリスト・エコフェミニズム、の四つに類型化した。(A)の「リベラル・エコフェミニズム」は、「自然と人間の関係を現存の統治機構の内部から新しい法律や規制を成立させることによって変えようとする」(250)ことを目的とし、現状の資本主義を含めた体制を維持しつつ環境問題解決とジェンダー平等の双方の達成を目指すものである。

(B)の「カルチュラル・エコフェミニズム」は、「女と自然の地位を高め、解放す

ること」(259)を指し、「しばしば反科学、反技術の観点から、カルチュラル・エコフェミニストは女神崇拜、月、動物、そして女性の生殖器官を中心とした古代の儀礼を復活させることにより、女と自然の関係性を讃える」(260)。「女と自然との間の特別な歴史的関係を認め」(264)るが、このように前近代的で女性原理を賛美し、男／女の二項対立を保持するカルチュラル・エコフェミニズムは、本質主義的 essentialist で性差極大的 maximalist とされ、特にポスト構造主義を経たフェミニズム内では(も)批判的となりがちである(e.g., アライモ・クズネツキー 2022: 213-214 [アライモの発言])。

(C)の「ソーシャル・エコフェミニズム」は、マレイ・ブックチン(ブックチン)が創始者であるソーシャル・エコロジーのエコフェミニズム版である。ソーシャル・エコロジーは人間による自然支配と人間による人間支配は同根であり、両者の支配を終焉に向かわせることが肝要、と主張したが、その主張をベースとするソーシャル・エコフェミニズムは次のように論じる。「ソーシャル・エコフェミニズムは、経済的・社会的な位階制を打倒することによって女を解放すると主張する。この位階制は生の全ての側面を、今日では子宮さえ侵している市場的な社会関係に変えてしまう」(マーチャント 1994 [1992]: 265)。

(D)の「ソーシャリスト・エコフェミニズム」は、ジェームズ・オコンナーの主張に代表されるソーシャリスト・エコロジーのフェミニスト版であり、マーチャント(1994 [1992])はその主張を以下のようにまとめている。「資本主義的家父長制の批判を提出[し][中略]、生産と再生産、生産とエコロジーの間の弁証法的対立関係に焦点を合わせる。ソーシャリスト・エコフェミニズムの全体的視野から社会的でエコロジカルな変化を分析し、生の持続可能性と公正な社会に通ずる社会的行動を提案する」(267)。なお、ソーシャル・エコフェミニズムとソーシャリスト・エコフェミニズムの区別はそれほど明確ではない。事実、マーチャントも両者をほぼ同じものとして記述している場面(250-251)もある。

実際に鶴見をエコフェミニストと位置付けていく作業の前に、次章では、その土台として鶴見の生涯とその仕事を俯瞰しておきたい。

3. 鶴見和子とは誰か

鶴見和子は1918年に東京で生を受けた。1939年に津田英学塾(現・津田塾大学)を卒業後に渡米、同年に当時は女子大であったヴァッサー大学大学院に入学、1941年に哲学修士号を取得した。卒業後はコロンビア大学大学院に進学、博士資格試験に合格するも第二次世界大戦の激化により已む無く帰国。日本で生活綴方運動(生活記録運動)に関わった後、1962年に再び渡米、プリンストン大学大学院に初の“女子学生”8人の1人として入学。マリオン・J・リーヴィ・Jr.の下で社会学、特に近代化論を研究し、1966年に博士論文“Social change and the individual: Japan before and after defeat in World War II (社会変動と個人—第二次世界大戦敗戦以前以降の日本)”(Tsurumi 1970)で博士号を取得した。帰国後は1969年から上智大学で教鞭を執り、1989年に退職した後も執筆・講演と積極的に活動していた。

そして1995年12月24日、クリスマスイブ。脳出血に倒れ、左半身麻痺となる。不幸中の幸いで言語・認知能力は残り、その後は介護付有料老人ホームで生活しながら研究と執筆を続けた。その中で過去の論考の集大成として『コレクション鶴見和子曼荼羅』全九巻（藤原書店）を出版。2006年に大腸癌で逝去した。享年88だった。鶴見（1997e [1996]）は倒れた直後に出版された「わたしの仕事」と題した論文で、生涯の仕事を「前期」「後期」の2つの時期に腑分けしている（10-14）。「前期」には2つの流れがあり、中国・カナダの社会変化と文化比較、そして上述の生活綴方運動である。「後期」には下記①～⑤の5つの流れがあり、①博士論文の一部の日本語での論文文化、②柳田国男への関心、③不知火海総合学術調査団の一員として水俣調査への参加、④南方熊楠の研究、⑤中国の社会学者・費孝通との中国での内発的發展に関する調査、である。

後期の鶴見は、本稿が目するエコフェミニズムの接頭語である“エコ”の部分、すなわち環境問題に深く関わった時期でもあった。その中で鶴見は独自の「内発的發展論」⁽⁷⁾の構築に着手する。鶴見曰く、内発的發展論は2人の偉大な思想家を礎としていた。1人はアメリカのマクロ社会学の大家であり、鶴見の師のリーヴィ・Jr.の師でもあるタルコット・パーソンズ（1902-1979）で、社会（特に西欧社会）が内側から近代化していくことを内発的發展と称していた（石牟礼・鶴見 2002：107-108；鶴見 1998h [1991]：278）⁽⁸⁾。もう1人は日本の民俗学者の柳田國男（1875-1962）で、1975年に“Yanagita Kunio's work as a model of endogenous development（内発的發展のモデルとしての柳田國男）”という論文（Tsurumi 1975）を上梓している。

鶴見の内発的發展論は「脳出血以前の内発的發展論」と「脳出血以降の内発的發展論」の2つに大別することができる。まず前者の脳出血以前の内発的發展論について。鶴見は上智大学での最終講義で次のように定義していた。「それぞれの地域の生態系に適合し、地域の住民の生活の基本的必要と地域の文化の伝統に根ざして、地域の住民の協力によって、発展の方向と筋道をつくりだしていくという創造的な事業」（鶴見 1999c [1989]：32）、と⁽⁹⁾。そして別稿（鶴見 1999b [1991]）でその条件を4点、提示している。

- (1)「地域を調査の単位とする」(74)
- (2)「地域の生態系と調和した発展を強調する」(74)
- (3)「地域に集積された社会構造および精神構造の伝統を重視する。現代の問題を解決するために、人々は伝統の中から役に立つものを選び出し、それを新しく創り直して使うことができると考える」(74)
- (4)「人間の成長を主要目標とし、経済成長をその条件と見なす」(75)

一方、脳出血以降の鶴見は、内発的發展論の力点を（4）の人間の成長へとシフトさせている。鶴見はこう述べる。「病気になってから、『内発的發展論』が自分のものになってきた、という気がしている。生者の立場——倒れる前——の内発的發展論と、死者の立場——倒れてのち——の内発的發展論では、後者の方が一歩深化したのだと思う。倒れてから、人間の内発性が自覚されるようになった。それを軸にして、社会変動を考える、それが内発的發展論だ」（鶴見 1999a [1998]：342）、と。換言すれば、また条件（2）の「地域の生態系」＝〈外なる自然〉に対比させて言い換えれば、病に

倒れた以降の鶴見は内発的発展論の焦点をより〈内なる自然〉＝「一人一人の内発性」(赤坂・鶴見 2015 [1999]: 228)に移したように見える。

このように、脳出血以前と以降で転回 turn を見せた鶴見の内発的発展論に対し、内発的発展論の応用モデルと言ってよい東北学を提唱した民俗学者の赤坂憲雄(2015 [2006])は、鶴見の逝去直後に次のように記している。

[鶴見が] 脳出血で倒れたあと [中略] これから内発的発展論に魂を入れる仕事に取り組みたい [と対談で話しており]、そんな言葉に衝撃を受けた。[中略] 鶴見和子という名前は、やはり内発的発展論とともに記憶されねばならない。それはそもそも欧米中心主義の所産である近代化論にたいして、叛旗を翻すところに始まったが、この世紀の移ろいのなかで、グローバリズムの専制に向けてのもっとも優れた抵抗の思想として、くりかえし想起されることになるはずだ。この弧状なす列島の湿った風土が産み落とした、きわめて個人的にして普遍的でもある思想、その稀有なるひとつとしても記憶されねばならない、と思う。(37-38)

鶴見は1976年から1981年にかけて、不知火海総合学術調査団という水俣病を調査する学際的な調査団に参加している⁽¹⁰⁾。当時、このような調査団に“文系の”かつ“女性の”学者が参加することは、その二重の意味において画期的なことであった⁽¹¹⁾。調査の中で鶴見は内発的発展論の展開を試みているが、それについて石牟礼道子との対談で鶴見は以下のように振り返っている。少し長くなるがそのまま引用しよう。

[アメリカ留学から] 日本に帰ってきて、日本では公害先進国、水俣病が起きる。そして日本は公害先進国になった。ちょっとおかしいんじゃないかという感じがしてくるわけ。アメリカ流の近代化論をあてはめると、公害問題が最初に近代化のはっきりしたアンチテーゼを示しているのに、水俣のようになっていくのがいいことになるわけよ。水俣のようなところはどんどん捨てちゃって、どんどん大工業化して、自然をどんどん破壊していけばいいことになる。そしてどんどん経済成長していく。じゃあ、人間はどこへ行くんだろうって、わからなくなるわけよ。そこで考えたのが、[中略] 自分たちの地域の自然生態系に適合していて、それぞれの地域の人々の必要に応じて、人間を幸福にしていくような発展の仕方があるのではないか、ということを考えはじめたのが内発的発展論のはじまり。

水俣はすごくいい事例だったわけ。後発国がどんどんあのやり方でいけば、どこもかしこもみんな水俣になっちゃう。工場は、水俣がだめなら千葉へ行くとか、工業は移動していける。ところがそこに住んでる人は、そういうわけにいかない。そこに代々住んでるんだから。そういう問題が出てきたからはじめてわかった。内発的な発展、水俣が水俣なりに発展していくというのはどういう形によってであろう。そのときに患者さんたちの思い、道子さんは、死ぬまで希望をもっているのが人間であるとおっしゃってるけれど、その希望というのは、影の部分、実像の影であって、その人たちが言葉で述べないこと。述べないけれども心の奥底に念いとして持っているもの、それを大事にしていかなければならない。[中略] それは念いなの、望

みな、願望なのよ。そしてそれは語られない、深く沈んでいる願望なの。それをどうやってだしていか。そして人々の思いを社会変化の方向づけに使っていか。それが私にとっては内発的発展論のはじまり。だから水俣というのは、すごく私にとって貴重な教えであったわけ。(石牟礼・鶴見 2002: 109-111)

鶴見は、調査を通じて「人間は、自然の^{まった}完き一部分である。したがって、人間は自然を破壊することによって、自分自身の身体と心とを破壊しているのだ」(鶴見 1999d [1996]: 57) という境地に至る。そして「地球的規模での自然破壊を癒すには、より暴力の少ない科学・技術で補完することが大切である」(鶴見 1999d [1996]: 58) とし、日本の内発的発展論のモデルを提示したとする柳田国男 (1875-1962) (e.g., Tsurumi 1975; 鶴見 1998h [1991], 1999b [1991])、内発的発展論において各地域を結び付ける可能性を秘めた“南方曼荼羅”を提示した南方熊楠 (1867-1941) (e.g., 鶴見 1978, 1998f; 松居 2015)、自然科学/社会科学/人文科学の枠にとらわれない「自然学」を提唱した今西錦司 (1902-1992) (今西 1986) の仕事を互いに紐づける重要性を説いていた⁽¹²⁾。

4. 忘れられたエコフェミニスト——鶴見和子

前章では、脳出血に倒れた直後に出版された小論「わたしの仕事」(鶴見 1997e [1996]) を軸に鶴見の生涯とその仕事を俯瞰した。その小論の最後で鶴見は、残り少ない時間の中で取り組みたい3つの仕事のうちの1つとして『「価値としての共生」(生物学用語としての共生と区別する)としてアニミズムの再定義する』(15) ことを挙げている。鶴見は「価値としての共生」には少なくとも以下の4つの層があるとしている(15)。

- 1) 人間と人間以外のすべての自然のものとの共生
- 2) 女と男との共生
- 3) 異文化をもつ人と人との間の国境内および国境をこえた共生
- 4) 異世代間(死者—生者—これから生まれてくる生命)の共生

第2章で定義したように、本稿のエコフェミニストの定義は「環境問題とジェンダー問題を共に思考・実践する思想家」であるが、この「価値としての共生」の4つの層を取り上げただけでも、人間 human と人間外存在 non-human としての自然との共生【1】、環境倫理学の鍵概念の1つでもある世代間倫理【4】、そして女男の共生【3】を説く鶴見は実は／実にエコフェミニストであった、と論じることができよう。そして冒頭で一部引用したように、自らも〈エコフェミニスト〉の看板を掲げて下ろさなかった綿貫礼子(1999)だけが唯一、そのことに直感的に気づいていた。鶴見和子を「現代の女シャーマンであり、[世界的に著名なエコフェミニストである] インドのヴァンダナ・シヴァさん(物理学者)と並んで日本のかけがえのないエコ・フェミニスト」(68)と位置付けていたのである。

管見の限り、鶴見本人が自ら「エコフェミニスト」であると(「フェミニストである」とでさえ【!】)発言した記述を目にしたことはない⁽¹³⁾。加藤シヅエ(1999)が鶴見は

「日本の女性史に大きな足跡を残した数少ない人物の一人」(22)と見做しているにも関わらず、である。しかし鶴見は、特に1990年代初頭～半ばに環境とジェンダーが交差する問題に積極的に関与している。1990年10月8日に綿貫礼子が設立し代表に就任した「チェルノブイリ被害調査・救援」女性ネットワークが立ち上がり、鶴見は代表委員に就任。翌月の11月29日には第1回環境シンポジウム「五年目のチェルノブイリの子どもたちに何が起きているか」では第一部のパネリストとして参加している。また続く翌年の5月11日に開催された第2回環境シンポジウム「いのちと科学技術—チェルノブイリが問いかけること」では第二部のパネル討論の司会を務めた(綿貫他1992:290-292)。

また1993年3月27日には綿貫礼子、上野千鶴子らとともにチェルノブイリ・チャリティシンポジウム「女が語る—戦争・性・核・地球」にパネリストとして参加、女性の非暴力と力と生命の知恵について発表した(能澤・鶴見1999:417)。1994年4月9日には国際シンポジウム「女性と環境」⁽¹⁴⁾のセッション2「女からの提案—人間と環境の関係をこうつくりたい」で司会を務めている(419)。同年に発表した論文「エコロジーの世界観」(鶴見1996a [1994]:306)では、エコロジーを超学際的な学問と位置付け、その土台となる学問の1つとして女性学を含めている。翌年の1995年8月23日には国際大学婦人連盟・第25回国際会議・パネル討論会で基調講演「平和のための戦略—女性の役割」を発表、そこでもエコフェミニズムの思想に共鳴するかのよう「来るべき将来の世代のための地球を保全するために、私たち女性は、男性とも手を携え、核のない、汚染のない世界をめざして活動しなくてはなりません」(鶴見1996b:258)と述べた。

このようにエコフェミニスト——正確には「忘れられたエコフェミニスト」——と位置付けられる鶴見は、奇しくも綿貫(1999)が鶴見を「現代の女シャーマン」(68)と称していたように、自身もシャマニズムの可能性を模索していた。鶴見(1998a [1992])は「アニミズム・シャマニズムと暴力のより少ない科学」という優れた論考で、文化人類学者のエドワード・タイラー(1832-1917)を基盤にアニミズムを「共時的に、地球上の生きているものも生きていないものも、すべてが魂をもって、対等に、共に生きあっているという信仰」(280)と定義する。そして現在の自然に対する暴力的な科学に対置させて「暴力のより少ない科学」を提起しながら、アニミズムとシャマニズムの接続を企てる。シャマニズムは「通時的に、すべてのものの生命の連続を祈念する」(280)信仰と定義され、暴力のより少ない科学を創出する際の「動機づけの源泉」(279)である。鶴見によるとシャマニズムが具現化されたのが母子神信仰であり、それは綿貫礼子の言う〈女性原理〉⁽¹⁵⁾と一致する。そして水俣の女性シャーマンの例として、語部の石牟礼道子、水俣病患者の杉本栄子、胎児性水俣病患者の坂本しのぶらを挙げる(鶴見1997d [1990]:342)。中村桂子は鶴見との対談の中で、アニミズムとシャマニズムをエコロジーの台座とする鶴見の仮説は「日本と女性が生きてくる」(中村・鶴見2002:11)のものであると喝破する。実際、鶴見は、唯一の例外である天皇を除いて、沖縄のノロを含め、日本のシャーマンは代々女性であったとしている(鶴見1998g [1981]:105; 鶴見の考える女性シャーマンの原像の六つの特徴については鶴見1997d [1990]:328-329を参照)。

ここで一步、論を先に進め、第2章で概観したマーチャントのエコフェミニズムの四類型のうち、鶴見のエコフェミニズムはどのカテゴリーに当てはまるのか、思考実験してみたい。鶴見の展開する内発的發展論は、米ヴァッサー大学に提出した修士論文等を通じて自家薬籠中の物としたマルクス（主義）の史的唯物論的な、また米プリンストン大学で習得した近代化論的な単系發展説を採らず、多型發展説を採る（鶴見 1998b : 527 ; cf. 川勝 1999 : 358-359）。「地球的規模での環境破壊に、マルクス主義も近代化論も、配慮が欠落していると思う」（鶴見 1997a [1991] : 313）からである⁽¹⁶⁾。この意味で、鶴見流のエコフェミニズムは、四類型（A）～（D）のうち、近代（化）論的な（A）「リベラル・エコフェミニズム」、そして史的唯物論的な（C）「ソーシャル・エコフェミニズム」と（D）「ソーシャリスト・エコフェミニズム」には該当しないと言ってよい。

したがって、鶴見は、エコフェミニストの中でもカルチュラル・エコフェミニストであった、と言ってみたい。ここで第2章のマーチャントのカルチュラル・エコフェミニズムの定義を思い出されたい。マーチャント（1994 [1992]）によると、「カルチュラル・エコフェミニズム」は、「女と自然の地位を高め、解放すること」（259）を目指し、「しばしば反科学、反技術の観点から、カルチュラル・エコフェミニストは女神崇拜、月、動物、そして女性の生殖器官を中心とした古代の儀礼を復活させることにより、女と自然の関係性を讃える」（260）のであり、「女と自然との間の特別な歴史的関係を認め」（264）、前近代的で女性性を賛美し、男／女の二項対立を保持する傾向にある。女性である自分は「特権階級」（中村・鶴見 2002 : 148）であるとし、特に脳出血以前の鶴見は「文化の根としての女の力」（鶴見 1998c [1978]）「女性文化が人類に幸福をもたらす」（鶴見 1998d [1975] : 335）といった発言をしており、男／女の二項対立を保持しながら、上述のように女性の立場から暴力のより少ない科学、また〈シャマニズムと母子神信仰＝女性原理〉を基盤としつつ女性と自然の尊重と解放を唱えた⁽¹⁷⁾。また「インディアンの生命の母神」というエッセイでは、カナダ・オンタリオ州にあるインディアン居留地ホワイト・ドッグの酋長の妻ジョセフィーンの話を紹介しながら、「白人によって汚された自然環境を修復するためには、インディアンとしての自覚をとりもどし、自然と共生する暮らしの流儀をとりもどすことだ」という女の知恵と実行力は、自分たちの仲間と、その子どもたちや孫たちのずっと先の生命のつながりを願う、深い心に根ざしている。[中略] わたしたち日本の女は、ジョセフィーンとその仲間たちから学ぶことができる。これは、インディアンの母神からわたしたちへの生命のメッセージである」（鶴見 1992 : 43）と結んでいる。

加えて、1980年代の早い時期から、冒頭でも言及したカルチュラル・エコフェミニストとされるイヴァン・イリイチに衝撃を受けたとし（鶴見 1998e [1981]）、1980年にはイリイチと横浜で初対面、1981年にはイリイチ・フォーラムを玉野井芳郎とともに発足させて代表幹事に就任し、翌年のイリイチも参加したシンポジウム「いま、反核と平和の根拠を問う」の討論三「シャドウ・ワークをめぐる」でも司会を務めている（能澤・鶴見 1999 : 399-401）。イリイチは失われた前近代を志向する後向き思考 backward thinking で、それは上述のように脳出血以前の鶴見の思考と一致していると考えられるが、特に脳出血以降の鶴見（1998b）は脱近代を志向する前向き思考

forward thinking に若干転回したようにも観える。第3章の最後で言及したように、晩年は史的唯物論と近代化論に代わる「可能性の理論」(529)として南方熊楠が提示した“南方曼荼羅”の内発的発展論における援用を構想していた。鶴見の南方曼荼羅の定義は以下である。「[史的唯物論や近代化論とは異なり]南方曼荼羅では、何ごとも排除せずに配置を変えることによって社会変動をもたらす。配置を変えることによってそれぞれの個は、全体のなかに異なる意味を与えられることになる。[中略]地球を守りながら、同時に人類がさまざまな多様な社会変動の経路をたどり、社会の構造を創造してゆく、その道筋を示唆しているのが南方曼荼羅ではないだろうか」(529)。そのような転回にも関わらず、曼荼羅自体の“前近代性”、そして上述の鶴見の発言を総じて鑑みると、「忘れられたエコフェミニスト」としての鶴見和子は、エコフェミニストの中でも実はカルチュラル・エコフェミニストであった、と言ってよいのではなかろうか。

5. 終わりに——蘇るエコフェミニストとしての鶴見和子

本稿では、鶴見和子を「忘れられたエコフェミニスト」として論証することを目的とし、第2章でエコフェミニズムの定義を含めた小史を確認した後、第3章で鶴見の来し方を概観し、第4章で鶴見をエコフェミニストとして位置付けることを試みた。それは鶴見和子をエコフェミニストとして蘇らせる企てでもあった。また、そこから議論を一步前に進め、鶴見をカルチュラル・エコフェミニストとして(再)定義することも試みた。

本稿では、議論の過剰な複雑化を避けるため、エコフェミニズムを「環境問題とジェンダー問題を共に思考・実践する思想」と、エコフェミニストを「環境問題とジェンダー問題を共に思考・実践する思想家」と、簡素な定義を採用した。一方で、米国の著名なエコフェミニスト Greta Gaard (1993) は、エコフェミニズムは環境問題とジェンダー問題に留まらず、究極的には「あらゆる抑圧形態に終止符が打たれることを求め」(1)る思想だと喝破する。鶴見(1999a [1998])は内発的発展論の究極の目標は「いかなる理由があっても、戦争をしない、暴力を使わない、[中略]何もかも排除せず、何もかも殺さないで、どうやって社会を変えられるか、人間を変えられるか、それを考える」(343-344) ことにある、としていた。ここでは、Gaardの解放と平和を目指すエコフェミニズムは、鶴見の非暴力 non-violent で包摂的 inclusive な内発的発展論と邂逅する。

冒頭で述べたように、日本では1980年代半ばの上野-青木論争以降、日本の論壇ではエコフェミニズムは一面的に理解され結果として誤解されてしまい、その後は「エコフェミニズム」「エコフェミニスト」という語の使用が憚られる状況が続いていた。もしそのような状況がなければ、自ら「私はエコフェミニストである」と主張する——鶴見和子もそうだったかも知れない——か、または他者からそのように位置付けられていた思想家も少なからずいたのではないだろうか。本稿は“後から来た者 late comer”の視点から鶴見を歴史化し、エコフェミニストとして(再)定位した。今後は鶴見と同様に、一般にはエコフェミニストとみなされていない思想家・作家——例えば本論にも登場した石牟礼道子、また森崎和江⁽¹⁸⁾、伊藤比呂美、宮迫千

鶴など——も「忘れられたエコフェミニスト」として再定位することができないか、その可能性を模索していきたいと考えている。

* 本稿は2022年7月12日の“International Conference: Non-Western Approaches in Environmental Humanities”での発表(Morita 2022c)に基づいている。論旨については日本のエコフェミニストの第一人者で大学院時代の恩師・萩原なつ子名誉教授(立教大学)と、鶴見和子に直接指導を受けた大学時代の恩師・平尾桂子教授(上智大学)との対話からもインスピレーションを得ている。記して感謝申し上げる次第である。

** 本研究は(公財)アジア女性交流・研究フォーラム(KFAW)の客員研究員研究「日本のエコフェミニストの系譜学」の一部である。

■註

- (1) 言うまでもなく、「忘れられたエコフェミニスト」という主題は民俗学者・宮本常一の名著『忘れられた日本人』(1984)を意識している。鶴見は中村桂子との対話の中で、全12巻に渡る書籍シリーズ『日本民俗文化大系』の第4巻(鶴見1978)「南方熊楠特集」で執筆担当を割り当てられたのは、歴史学者の上田昭一に加えて宮本の推薦があったから、と記している(中村・鶴見2002:71-72)。
- (2) 日本の第二波フェミニズムを牽引してきた井上輝子(2021)は遺稿となった『日本のフェミニズム 150年の人と思想』で日本のフェミニズムを第Ⅰ期(1868-1945)、第Ⅱ期(1945-1970)、第Ⅲ期(1970-1999)、第Ⅳ期(2000-)に分けている。第Ⅲ期と第Ⅳ期の執筆については残念ながら未完のまま鬼籍に入られたが、予定されていた「幻の目次」(12-13)を見ると、上野-青木論争やエコフェミニズム、環境問題への言及はなく、日本のフェミニズムにおいて如何に〈環境〉の視点が欠落してきたのかが見て取れる。岩波書店が刊行している「新編 日本のフェミニズム」の各巻のテーマも「1 リブとフェミニズム」「2 フェミニズム理論」「3 性役割」「4 権力と労働」「5 母性」「6 セクシュアリティ」「7 表現とメディア」「8 ジェンダーと教育」「9 グローバリゼーション」「10 女性史・ジェンダー史」「11 フェミニズム文学批評」「12 男性学」と、〈環境〉の視点は無い。
- (3) 本章は筆者の過去の論考(森田2022a)を下敷きとしている。
- (4) Merchant(2022)によると、d'Eaubonneがエコフェミニズムという企てに着手し始めたのは1972年のことであった。もちろんd'Eaubonne以前にも、アメリカ家政学の‘母’であるエレン・スワローや『沈黙の春』のレイチェル・カーソン、ラディカル・フェミニストのシュラムス・ファイアストーンら、エコフェミニズム思想を体現している者はいた。なお、鶴見は同窓(ヴァッサー大学)のスワローの業績を認識しており、一時期研究もしていた(鶴見1996a [1994]:285-290)。
- (5) 「男性性」は“the male,”「女性性」は“the feminine”の訳語。「男性原理」「女性原理」と訳出しようとも考えたが、日本では冒頭で言及した上野-青木論争と紐付けられてしまう可能性を危惧し採用しなかった。
- (6) 鶴見(1996a [1994]:304-305)は、マーチャントの著作『自然の死—科学革命と女・エコロジー』(1985 [1980])の中から、地球を女性としてなぞらえる一例としてのガイア理論への言及を引用している。
- (7) 鶴見は、代替語として「土着的発展論 indigenous development」やダグ・ハマーショルド財団の提示した「もうひとつの発展 alternative development」の用語も検討したが、最終的には内発的發展という語に落ち着いたことを告白している(鶴見1999e [1989]:

- 328-329)。
- (8) なお鶴見は、パーソンズよりも50年前に夏目漱石が外発的／内発的という表現を使っていたことを記している。パーソンズは後発国の近代化は外発的であることを当然と考えていたが、夏目は‘後発国日本’も内発的に発展すべきだと考えていた(鶴見 1997c [1980]: 517-518)。
- (9) 環境学の概念「生態地域主義 bioregionalism」は、一見すると鶴見の内発的発展論と同一概念のようにも思える。しかし前者は「土地の生態系に適応する社会を目指す地域共同体ベースの運動」(庭野・巴山 2014: 289)で「適応」とあるように静的 static である一方、鶴見の内発的発展論は土地の生態系と調和しながらも「発展」とあるように動的 dynamic な側面に主眼があった。なお、グローバル化による脱領域化 deterritorialization が進む中で、地域に強調点を置かないエコ・コスモポリタニズム eco-cosmopolitanism (Heise 2008) や惑星思考 planet-thought/planetarity (Spivak 2006) といった概念が誕生している。この辺りの概念整理については稿を改めたい。
- (10) なお鶴見は、81年に調査団の試みが終了した後も2年間、個人的に調査を継続している(鶴見 1997b [1995]: 221)。
- (11) 筆者は、本稿の焦点であるエコフェミニズムに加えて、人文学内でタコツボ的に実践されてきた環境文学研究、環境哲学、環境人類学といった各領域の環境系の学問を統合する環境人文学を専門としているが、不知火海総合調査の試みは、〈環境人文学〉という概念が誕生する以前に実践された環境人文学的な領域横断の研究であった、と位置付ける環境人文学者もいる(結城 2017: 245-248)。
- (12) なお、内発的発展論の分析対象や方法論の特徴を12点に簡潔かつ卓抜にまとめた論考には、川勝平太(1999)の「解説——内発的発展論の可能性」がある。
- (13) 上野千鶴子(1999 [1998])も「鶴見さんは水俣調査を経過して、環境やエコロジーの問題に深く傾斜したが、女性の問題について発言なさらないのを、わたしは不思議なことに思っていた」(150)と吐露している。綿貫(1999)も上野に同調するかのようになり、しかしながら「女性の問題について発言なさらない」くても鶴見の発言の通奏低音としてあったメッセージについてこう語る。「すでに評論家として著名だった[鶴見]和子さんが真のフェミニストであることを、私の世代の女たちは疑わなかった。彼女の著書で表だって『女性』が語られていなくとも、その文の底流には、脈々と女性の眼が流れているのを肌でいつも感じていた」(66)。
- (14) 正確には公開シンポジウム「女性・環境・平和」で、国際交流基金の「欧州女性環境問題研究グループ招聘事業」(1994年3~4月)の一部であった(森田 2022b: 63)。拙稿(2022b)では日本のエコフェミニズムの流れを第一波~第四波に腑分けしているが、同事業は第二波を象徴する出来事として位置付けている。
- (15) 〈女性原理〉はあくまで「原理」であり、現実の女性と一致するとは限らない(鶴見 1998a [1992]: 279-280)。綿貫(1999)によると、鶴見は、〈男性原理〉を「権力とか金力とか名声とか」(67)に価値を置く「生命を考えるときでも一代限りのこととして捉える」(68)原理として、〈女性原理〉を「いのちの連続を究極の価値とする」(67 [強調原文])原理として、各々捉えていた。
- (16) ただし近年、マルクスのエコロジーへの理論的貢献の可能性に係る研究が進んでいる(e.g., 斎藤 2019, 2020)。
- (17) 上野千鶴子(1999 [1998])は、鶴見、猪口邦子との3人の鼎談の中で、鶴見が「あたしはオンナ・コドモの立場に断固として立ちます」(150)と発言したのを記録しており、そこからも男／女の二項対立を維持していることが読み取れる。綿貫(1999)も同調するかのようになり、『女性とか男性とかいったジェンダーをこえた』ところに彼女[鶴見]の才能が開

花しているのではない」(66)と述べている。なお、上野の言及する鼎談とは、能澤・鶴見(1999)『『鶴見和子研究』年譜』によると、1986年12月8日の「フェローシップズ86 ウーマンズトーク『地球は私の仕事場です』」(於・スパイラルホール)を指しているようである(406)。

(18) 本稿脱稿後、村上潔(2022)が森崎和江をエコフェミニストとして位置付ける論考を発表している。

■参考文献

- 赤坂憲雄(2015)。「凜として群れぬ生き姿—鶴見和子さんを悼む」赤坂憲雄・鶴見和子『地域からつくる 内発的発展論と東北学』(36-38頁)。藤原書店。[原著:2006年]
- 赤坂憲雄・鶴見和子(2015)。「〈対談〉地球志向の比較学」赤坂憲雄・鶴見和子『地域からつくる 内発的発展論と東北学』(223-240頁)。藤原書店。[原著:1999年]
- アライモ、S.・クズネツキー、J.(聞き手)(2022)。「超身体性—ステイシー・アライモへのインタビュー」(森田系太郎・訳)『現代思想』第50巻、第2号(2022年2月号)、209-220頁。[原著:2020年]
- D'Eaubonne, F.(2000). What could an ecofeminist society be? *Ethics & the Environment*, 4(2), 179-184.
- D'Eaubonne, F.(2022). *Feminism or death* (R. Hottell & E. Ramadan, Trans.). London: Verso. (Original work published 1974)
- Gaard, G.(1993). Living interconnections with animals and nature. In G. Gaard (Ed.), *Ecofeminism: Women, animals, nature* (pp. 1-12). Philadelphia, PA: Temple University Press.
- Heise, U. K.(2008). *Sense of place and sense of planet: The environmental imagination of the global*. New York: Oxford University Press.
- イリイチ、I.(1984)。「ジェンダー 女と男の世界」(玉野井芳郎・訳)。岩波現代選書。[原著:1983年]
- 今西錦司(1986)。「自然学の提唱」講談社学術文庫。
- 井上輝子(2021)。「日本のフェミニズム 150年の人と思想」有斐閣。
- 石牟礼道子・鶴見和子(2002)。「〈鶴見和子・対話まんだら〉石牟礼道子の巻 言葉果つるところ」藤原書店。
- 加藤シヅエ(1999)。「日本の女性史に大きな足跡」『鶴見和子の世界』(22頁)。藤原書店。
- 川勝平太(1999)。「解説—内発的発展論の可能性」鶴見和子(著)『コレクション鶴見和子曼荼羅 IX 環の巻—内発的発展論によるパラダイム転換』(347-362頁)。藤原書店。
- 松居竜五(編著)(2015)。「南方熊楠の謎—鶴見和子との対話」藤原書店。
- マーチャント、C.(1985)。「自然の死—科学革命と女・エコロジー」(団まりな・訳)。工作舎。[原著:1980年]
- マーチャント、C.(1994)。「ラディカルエコロジー—住みよい世界を求めて」(川本隆史・須藤自由児・水谷広・訳)。産業図書。[原著:1992年]
- Merchant, C.(2022). Foreword. In F. d'Eaubonne, *Feminism or death* (R. Hottell & E. Ramadan, Trans.). London: Verso.
- 宮本常一(1984)。「忘れられた日本人」岩波文庫。
- 森田系太郎(2022a)。「〈交差性〉を脱人間中心主義化する エコフェミニズム再考」『現代思想』第50巻、第5号(2022年5月号)、247-259頁。
- 森田系太郎(2022b)。「日本のエコフェミニズムの40年—第一波から第四波まで—」萩原なつ子(監修)・萩原ゼミ博士の会(著)・森田系太郎(編著)『ジェンダー研究と社会デザイン

- の現在』(53-78頁). 三恵社.
- Morita, K. (2022c, July). The Japanese sociologist Tsurumi Kazuko's non-violent environmental thought. In A. Filipović (Moderator), *Towards Eco-epistemology and Biocentric Ethics*. International Conference: Non-Western Approaches in Environmental Humanities, online.
- 村上潔 (2022). 「森崎和江と／のエコフェミニズム 現状との接続線」『現代思想』第50巻、第13号(2022年11月臨時増刊号)、359-370頁.
- 中村桂子・鶴見和子(2002). 『〈鶴見和子・対話まんだら〉中村桂子の巻 四十億年の私の『生命』—生命誌と内発的発展論』藤原書店.
- 日本女性学研究会一九八五年五月シンポジウム企画集団(編)(1985). 『フェミニズムはどこへゆく—女性原理とエコロジー—』ウイメンズブックストア松香堂.
- 庭野義英・巴山岳人(2014). 「生態(生命)地域主義」『文学から環境を考える エコクリティシズムガイドブック』(小谷一明・巴山岳人・結城正美・豊里真弓・喜納育江・編著、289-290頁). 勉誠出版.
- 能澤壽彦(作成)・鶴見和子(校閲)(1999). 『「鶴見和子研究」年譜』『コレクション鶴見和子 曼荼羅 IX 環の巻—内発的発展論によるパラダイム転換』(363-424頁). 藤原書店.
- 大越愛子(1996). 「日本におけるフェミニズムとエコロジー」『闘争するフェミニズムへ』(157-179頁). 未来社. [原著:1991年]
- 斎藤幸平(2019). 『大洪水の前に—マルクスと惑星の物質代謝』堀之内出版.
- 斎藤幸平(2020). 『人新世の「資本論」』集英社新書.
- Spivak, G. C. (2006). World systems & the Creole. *Narrative*, 14(1) (January), 102-112.
- Tsurumi, K. (1970). *Social change and the individual: Japan before and after defeat in World War II*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Tsurumi, K. (1975). Yanagita Kunio's work as a model of endogenous development. *Japan Quarterly*, 22(3) (July 1), 223-238.
- 鶴見和子(編著)(1978). 『日本民俗文化大系(4) 南方熊楠』講談社.
- 鶴見和子(1992). 「インディアンの生命の母神」綿貫礼子+「チェルノブイリ被害調査・救援」女性ネットワーク(編著)『誕生前の死—小児ガンを追う女たちの目』(39-43頁). 藤原書店.
- 鶴見和子(1996a). 「エコロジーの世界観」『内発的発展論の展開』(277-312頁). 筑摩書房. [原著:1994年]
- 鶴見和子(1996b). 「平和と共生への戦略」上野千鶴子・綿貫礼子(編著)『リプロダクティブ・ヘルスと環境—共に生きる世界へ』(青海恵子・訳、248-258頁). 工作舎.
- 鶴見和子(1997a). 「マルクス主義から内発的発展論へ」『女書生』(310-313頁). はる書房. [原著:1991年]
- 鶴見和子(1997b). 「水俣民衆の世界と内発的発展」『女書生』(220-272頁). はる書房. [原著:1995年]
- 鶴見和子(1997c). 「内発的発展論へむけて」『コレクション鶴見和子曼荼羅 I 基の巻—鶴見和子の仕事・入門』(515-536頁). 藤原書店. [原著:1980年]
- 鶴見和子(1997d). 「宗教と女性」『女書生』(316-347頁). はる書房. [原著:1990年]
- 鶴見和子(1997e). 「わたしの仕事」『コレクション鶴見和子曼荼羅 I 基の巻—鶴見和子の仕事・入門』(342-346頁). 藤原書店. [原著:1996年]
- 鶴見和子(1998a). 「アニミズム・シャマニズムと暴力のより少ない科学」『コレクション鶴見和子曼荼羅 VI 魂の巻—水俣・アニミズム・エコロジー』(342-282頁). 藤原書店. [原著:1992年]
- 鶴見和子(1998b). 「あとがき」『コレクション鶴見和子曼荼羅 V 水の巻—南方熊楠のコスモロ

- ジー』(526-530頁). 藤原書店.
- 鶴見和子(1998c).「文化の根としての女の力」『コレクション鶴見和子曼荼羅 VI 魂の巻—水俣・アニミズム・エコロジー』(337-359頁). 藤原書店. [原著:1978年]
- 鶴見和子(1998d).「男性支配の社会における女性優位の文化」『コレクション鶴見和子曼荼羅 VI 魂の巻—水俣・アニミズム・エコロジー』(317-336頁). 藤原書店. [原著:1975年]
- 鶴見和子(1998e).「イリイチの衝撃」『コレクション鶴見和子曼荼羅 VII 華の巻—わが生き相^{すがた}』(267-268頁). 藤原書店. [原著:1981年]
- 鶴見和子(1998f).『コレクション鶴見和子曼荼羅 V 水の巻—南方熊楠のコスモロジー』藤原書店.
- 鶴見和子(1998g).「ナガサキ・水俣—わたしの平和学」『コレクション鶴見和子曼荼羅 VI 魂の巻—水俣・アニミズム・エコロジー』(100-113頁). 藤原書店. [原著:1981年]
- 鶴見和子(1998h).「柳田国男の普遍性—内発的発展の拠り所としての柳田学」『コレクション鶴見和子曼荼羅 IV 土の巻—柳田国男論』(275-314頁). 藤原書店. [原著:1991年]
- 鶴見和子(1999a).「あとがき 倒れてのちのわたしの『内発的発展』」『コレクション鶴見和子曼荼羅 IX 環の巻—内発的発展論によるパラダイム転換』(342-346頁). 藤原書店. [原著:1998年]
- 鶴見和子(1999b).「内発的発展論の原型—費孝通と柳田国男の比較」『コレクション鶴見和子曼荼羅 IX 環の巻—内発的発展論によるパラダイム転換』(67-148頁). 藤原書店. [原著:1991年]
- 鶴見和子(1999c).「最終講義 内発的発展の三つの事例」『コレクション鶴見和子曼荼羅 IX 環の巻—内発的発展論によるパラダイム転換』(29-55頁). 藤原書店. [原著:1989年]
- 鶴見和子(1999d).「最終の節目で出会うもの」『コレクション鶴見和子曼荼羅 IX 環の巻—内発的発展論によるパラダイム転換』(56-58頁). 藤原書店. [原著:1996年]
- 鶴見和子(1999e).「ゼミでしたこと、出会った人々—鶴見先生インタビュー—」『コレクション鶴見和子曼荼羅 IX 環の巻—内発的発展論によるパラダイム転換』(321-339頁). 藤原書店. [原著:1989年]
- 上野千鶴子(1999).「与えつづける人」『鶴見和子の世界』(149-152頁). 藤原書店. [原著:1998年]
- 綿貫礼子(1999).「『ないしょ話』—エコロジーとフェミニズムの二つの思想をめぐって」『鶴見和子の世界』(65-68頁). 藤原書店.
- 綿貫礼子+「チェルノブイリ被害調査・救援」女性ネットワーク(編著)(1992).『誕生前の死—小児ガンを追う女たちの目』藤原書店.
- 結城正美(2017).「環境人文学の現在」野田研一・山本洋平・森田系太郎(編著)『環境人文学 II 他者としての自然』(235-248頁). 勉誠出版.